# 木の実谷

上越市立吉川中学校
学校だより「第３号」
令和５年６月１５日発行

**教育目標　「向上心に燃え　心身ともにたくましく　実践力のある生徒」**


## 親の気持ち・子の気持ち

校長　櫻井　直人

今から20年前のことです。幼少期から野球をやってきた私は、野球部の顧問をしていました。部員数は約40名、部員ともども一生懸命、練習に励んでいました。「周囲に**感謝**、しっかりと**準備**、失敗しても**下を向くな**」をスローガンとして、どちらかというと厳しい指導をしていました。

あるとき、控え選手の保護者が私のところに相談にきました。「先生は、試合の時に**見に来てほしい**と言いますが、息子は『**見に来るな**』というのです。私たちは**見に行きたい**のですが、どうしたらいいか、わかりません」とのこと。その部員は一生懸命頑張っていますが、試合に出たり出なかったりの実力で、恥ずかしさもあったのでしょう。しかし私は、「〇〇くんが何と言おうと、ぜひ見に来てください」とその保護者に伝えました。すると、保護者のとった行動は「**隠れて見る**」だったのです。私は、その部員に伝えました。「保護者は君の気持ちと私の言葉で板挟みになっている。その結果、あの柱の陰から君に見つからないように観戦している。君は、両親を見つけても絶対に責めてはいけない。知らんぷりしていなさい。親の気持ちを考えなさい」と。その後、その部員は私の言う通り、知らないふりをしました。そればかりではなく、「今日は打ったよ」「今日はエラーしてしまった」と食事の時、試合の様子を話すようになったそうです。保護者はいつも嬉しそうに聞いていたとのことです。

もうひとつ。市内大会【当時は地区大会の前に市内大会があり、24校中12校が地区大会に進出】当日。いよいよ負けたら3年生は引退の大事な試合です。みんな緊張MAXで絶対に勝とうと意気込んでいます。そんなとき、主将で4番でキャッチャーの部員が、「申し訳ありません。スパイクを忘れました」と申しでてきました。当時、**道具を忘れたら試合には出場しない**、というきまりを作っていました。しかし大事な初戦です。負けたら終わりです。チームの大黒柱でしたが「残念ながら**1試合目は出場しない**」と本人に私から伝えました。チームは大騒ぎです。「ぼくのスパイクを使ってください」という控え選手や「すぐに親が届けるから」という周囲の保護者の意見もありましたが、私は、出場させませんでした。この件に関しては、「**厳しすぎる**」と一部の保護者からは理解していただけませんでした。しかし、その子の父親は「**監督の措置は当然だ**」と擁護してくれました。ちなみに、その初戦は勝ち、2試合目からは保護者の届けたスパイクをはいて大活躍し、市内大会、地区大会そして県大会も勝ち抜き、北信越大会にも出場しました。

数年後、成人式でその主将に会いました。彼は「正直、あのときは先生と親父に腹が立った。しかし今なら理解できる。おかげで**準備の大切さ**がよくわかり、**周りに感謝**できるようになった。ありがとうございました」と話していました。これが**成長**だと思います。**親は、そして教師は、子の、生徒の、成長につながることをやり続けたい**と考えています。